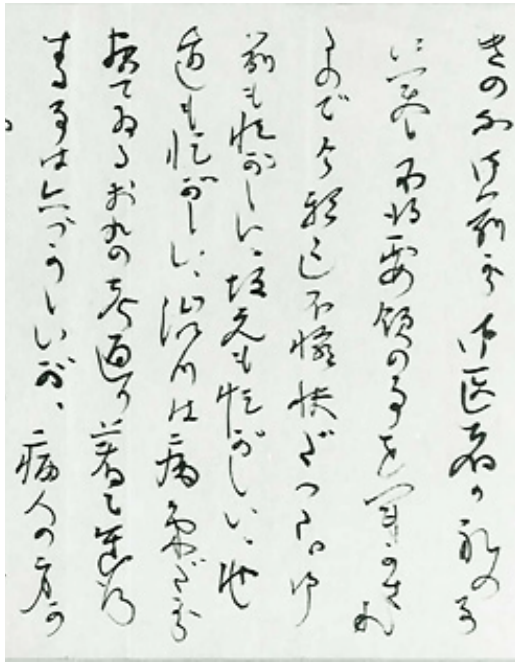
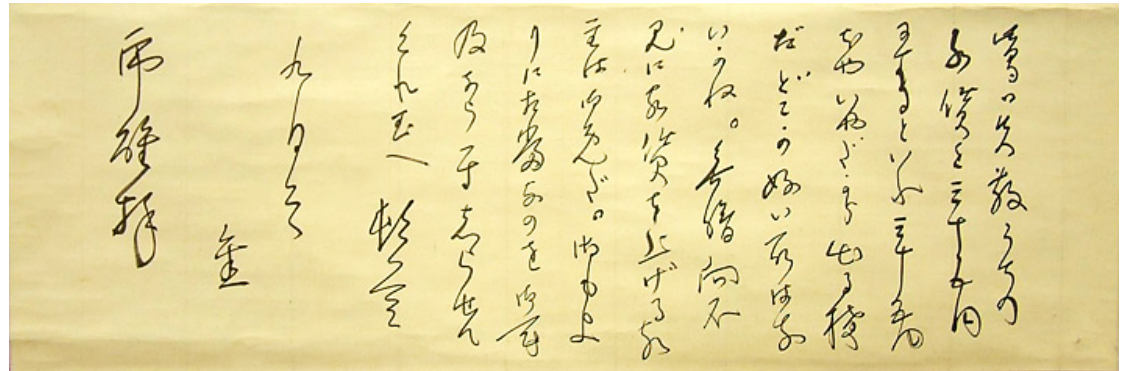


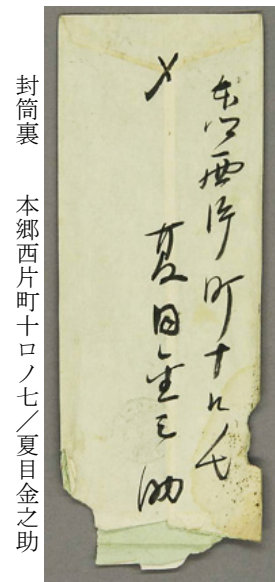
夏目漱石の夏目鏡子宛書簡（部分）



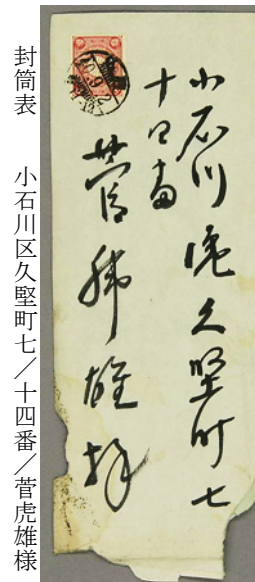
明治43年（1910）10月31日



漱石の菅虎雄宛書簡 明治40年（1907）9月2日付 早稲田大学図書館蔵



封筒裏 本郷西片町十ノ七／夏目金之助



封筒表 小石川区久堅町七／十四番／菅虎雄様

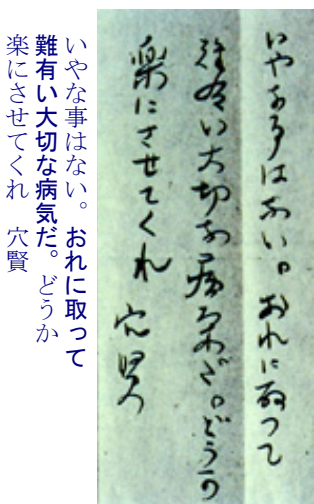
此間ハ失敬 うちの
家賃を三十五円
にするといふ。三十五円
ぢやいやだから出る積
だ。どこか好い所はな
いかね。無暗向不
見に家賃を上げる家
主は御免だ。御もよ
りに相当なのを御聞
及なら、一寸しらせて
くれ玉へ 頓首
九月二日 金
虎雄様

菅虎雄^{すがとらお} 1864年（1943年（昭和18））
ドイツ語学者、漱石の先輩であり親友、能書家
号は無為・白雲・陵雲など。福岡県久留米市の
生まれ。日本初のドイツ文学士。東京外国語学校、
第五高等学校、第三高等学校教授等を歴任。
1907年から1940年まで、第二高等学校
ドイツ語教授として勤務した。芥川龍之介、菊池
寛らは教え子。1910年から鎌倉に住んだ。
第五高等学校へ漱石を招き、円覚寺への参禅を
勧め、葬儀を手伝い、漱石の墓碑銘を揮毫するな
ど、菅虎雄は、漱石が亡くなるまで漱石のために
尽力した。漱石の死後、膨大な漱石から来た手紙
を妹の順に預け、焼却するように頼んでいる。



右は執筆中の菅虎雄

日下部鳴鶴の弟子
だったのか、廻腕法
で執筆している。
漱石は読めない書
があると、かならず
菅虎雄に相談したと
いう。



いやな事はない。おれに取って
難有い大切な病氣だ。どうか
楽にさせてくれ 穴賢

きのふ御前から御医者の方の事に
関し不得要領の事を聞かされ
たので今朝迄不愉快だった。御
も忙がしい、坂元も忙がしい、池
邊も忙がしい、渋谷は病氣だから
寝てゐるおれの考通り着々進行
する事は六づかしいが、病人の方か
今のおれに一番薬になるのはからだの
安静、心の安静である。必ず
しも薬を飲んでゐる許や寐てゐ
る許が養生ぢやない。いやな事

漱石の絵

「私は生涯に一枚でいいから人が見て難有い心持のする絵を描いて見たい山水でも動物でも花鳥でも構はない只崇高で難有い気持ちのする奴をかって死にたいと思ひます文展に出る日本画のやうなものはかけてもかきたくはありません」(大正2年12月8日付、漱石の津田青楓宛の手紙より)



漱石自画賛「山上有山図」大正元年(1912)11月 66.5×45.3 cm

「山上有山図」

賛

山上有山路不通
柳陰多柳水西東
扁舟盡日孤村岸
幾度驚群知波頭訪釣翁
漱石山人詩畫
山上に山有りて路通ぜず
柳陰に柳多くして水西東
扁舟 尽日 孤村の岸
幾度か驚群(知波頭 釣翁を訪う
漱石山人詩画

津田青楓の指導を受けて描いた最初の南画風作品。
水彩画の絵の具を使用している。
南画と水彩画の折衷か？



漱石筆「達磨渡江図」大正2年 紙本 40.5×18.0 cm 日本近代文学館蔵
漱石山房に掛けられていたという。



漱石筆「菊図」大正2年(1913)
落款に「大正二年秋日漾虚碧堂主人写」とある。漱石は自分の書齋を「漾虚碧堂」と号した

漱石は、幼少の頃から絵心があつた。夏目家の所蔵する五、六十幅の掛物、特に南画を見ることが少年漱石の楽しみだったという。大学生の時、絵画好きの正岡子規と出会った。
英国留学時も浅井忠と共にギャラリーを巡り多くの欧州絵画を鑑賞している。
帰国した漱石は、明治36年頃から水彩画や油絵をかきだした。水彩絵葉書は百枚以上あるといわれる。
本格的な画人漱石の誕生は、明治44年6月頃、日本画家の津田青楓との出会いから始まった。漱石の愛読者であつた青楓は漱石の門人になり文章の指導を受け、漱石は青楓を画の師と仰いだ。漱石の書画への情熱は激しかった。
彼の画の探求は、洋画から日本画へ、さらに南画へと展開していった。彼は南画の中の純粹な日本の美を求めつづけた。そして漱石は、画をかくことによつて忘我の心境に到つた。



漱石筆「あかざと黒猫」
大正3年頃 130×32 cm

漱石は絵のできについて「黒猫が一番悪いやうです」と言っている。



漱石筆の寺田寅彦宛水彩絵葉書
明治37年11月18日付

先達は晩餐会のた
め失敬然し僕のフロ
ックコートの出立を
見るといふのに
に帰るのも失敬だ
本郷六丁目二十五番
地敷中といふ女髪
結の隣に新しき
貸式階あり一寸見て
御覧
寅さん 金公

当時、絵ハガキが流行していたらしい。漱石は描きためていた。漱石山房には数百枚もの絵ハガキが保存されていたという。差出人には堺利彦、土井晩翠、杉村楚人冠、寺田寅彦、橋口貢、森田草平、釈宗演など多くの名がある。



漱石筆の橋口貢宛水彩絵葉書
明治37年8月1日付



漱石筆の橋口貢宛水彩絵葉書
明治37年9月22日付

「試験が済んだら 楽になり
ましたらう 小生大多忙
閉口 奈良の模様頗る面白
く候 是は朝貌の幽霊なり」



漱石筆「一路万松図」紙本着色
大正3年11月 135×32.5 cm
落款は、大正三年甲寅十一
月写于漾虚碧堂漱石
漱石による悟りの世界



漱石筆「水仙図」大正4年春 40.5×34.0 cm 日本画
落款は、乙卯春写于京都客舎 漱石山人

京都の旅亭大嘉で描かれた。大正4年の春、漱石は津田青楓や一草亭らと京都に遊んだ。そこで、祇園の妓子たちに書画帖を多く残している。『守拙帖』『観自在帖』『不知帖』『咄哉帖』『不成帖』など。

漱石の絶筆の漢詩（七律）
「無題」大正5年11月20日作
真蹤寂寞杳難尋
真蹤は寂寞杳として尋ね難し
欲抱虚懷步古今
虚懷を抱かんと欲して古今を歩む
碧水碧山何有我
碧水碧山何ぞ我有らん
蓋天蓋地是無心
蓋天蓋地 是無心
依稀暮色月離草
依稀たり暮色 月 草を離れ
錯落秋声風在林
錯落たる秋声 風 林に在り
眼耳双忘身亦失
眼耳 双ながら忘れ 身 亦失つす
空中独唱白雲吟
空中 独り唱す 白雲吟



漱石筆「秋景山水図」
大正4年3月3日
121.0×33.6 cm 紙本
落款は、大正四年三月三
日写于漾虚碧堂漱石山人

『ころ』の装幀 漱石の自装

漱石は装幀の美を非常に大事にした。彼は装幀のデザインに興味があった。橋口五葉に欧州の本を見せたり、世紀末芸術を紹介したりして、新しいデザインに開眼させようとした。その結果、明治39年『漾虚集』、明治40年『鶉籠』、明治41年『草枕』『虞美人草』などのデザインが生れ、つづいて、『三四郎』『それから』『門』『彼岸過迄』『行人』の装幀デザインや挿絵が生れた。



『それから』函装幀は五葉



『虞美人草』装幀は五葉



『行人』装幀は五葉



『明暗』装幀は津田青楓

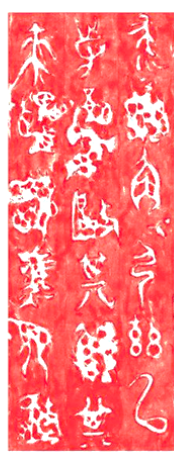
大正3年（1914）9月、岩波書店の処女出版として『ころ』が出版された。その出版の経費はすべて漱石が負担した。その「自序」に漱石は「・・・装幀の事は今迄専門家にばかり依頼してゐたのだが、今度はふとした動機から自分で遣つて見る氣になつて、箱、表紙、見返し、扉及び奥附の模様及び題字、朱印、検印ともに、悉く自分で考案して自分で描いた・・・」と記している。『漱石全集』の人氣によつて岩波書店は大きくなった。



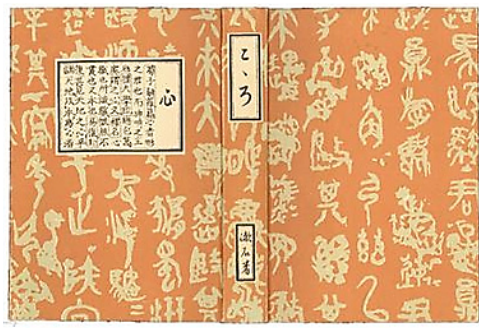
『ころ』装幀、漱石自筆版下（岩波書店蔵）



「石鼓文」拓本



草書風石鼓文
漱石の臨書



漱石自筆の石鼓文を伊上凡骨が木版におこしたもの

漱石の号の由来

『世説新語』や『晋書』孫楚伝などにある故事「漱石枕流」から取られた。「石に漱ぎ流れに枕す」と読む。「自分の誤りを認めずに、負け惜しみが強く、こじつけて言い逃れをすること」を意味する。

（原文）孫子荊、年少時欲隱。語王武子、当枕石漱流、誤曰、「漱石枕流。」王曰、「流可枕、石可漱乎。」孫曰、「所以枕流、欲洗其耳。所以漱石、欲礪其齒。」

（書き下し文）孫子荊、年少き時、隠れんと欲す。王武子に語るに、当に石に枕し流れに漱がんとすとすべきに、誤りて曰はく、「石に漱ぎ流れに枕す。」と。王曰はく、「流れは枕すべく、石は漱ぐべきか。」と。孫曰はく、「流れに枕する所以は、其の耳を洗はんと欲すればなり。石に漱ぐ所以は、其の齒を礪がんと欲すればなり。」と。



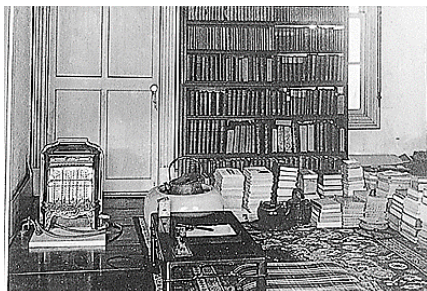
漱石書「岩波書店」看板

岩波茂雄は岩波書店創業者。長野県諏訪市の農家に生まれた。漱石の教え子。母に助けられ東京大学哲学科卒業、後、教師になったが辞め、大正2年8月、神田神保町に古本屋を開業。翌年9月、漱石の『ころ』を出版し出版事業を始めた。1946年4月64歳で逝去。



「岩波書店」

大正6年（1917）1月26日『明暗』発売当日、岩波茂雄と店員たち。上方に漱石揮毫の看板が見える。



漱石山房内部



漱石山房外部



岡本一平画「漱石先生之像」漱石山房で

「木曜会」の常連は、小宮豊隆・鈴木三重吉・森田草平・内田百閒・松根東洋城・中勘助・野上豊一郎・野上弥生子・寺田寅彦・阿部次郎・安倍能成・芥川龍之介・久米正雄・松岡譲らである。



津田青楓画「漱石山房図・漱石と十弟子」

「木曜会」は漱石門下の集りである。明治39年10月ごろ、鈴木三重吉の意見で毎週木曜日午後3時以降を漱石との面会日と定めたのが「木曜会」のはじまりという。漱石の教え子や小説家や学者など、漱石を慕う多くの若者たちが来ていた。会は、漱石の書斎（漱石山房）で開かれた。「木曜会」は漱石死後、月命日の毎月9日に集まる「九日会」として、1937年（昭和12年）まで続いた。「漱石のすぐ隣には寺田寅彦が背広で・・・その隣の安倍君は首をうなだれて、和服で・・・文部大臣として閣議に列席し・・・十弟子中社会的に最高の位置についた者は能成君が一番だ。今では貴族院議員で憲法審議会委員長で、学習院々長さんで帝室博物館々長で大へんだ・・・その隣には松根東洋城君が・・・いかにも宮内省事務官らしい・・・今は『渋柿』といふ俳諧雑誌を主宰して・・・宗匠になりきってござる・・・三重吉君がその隣に・・・三重吉君と東洋城との間にはさまって、後に野上白川君がある・・・黒猫がうづくまってる。森田草平君はその前に一人だけ片腕を組んで片方で煙草をふかしてある・・・阿部次郎君と小宮豊隆君が左の隅の方に一つの火鉢を囲んで・・・阿部君は、東北大学の教授におさまって・・・小宮豊隆君・・・このごろは音楽学校校長さんで・・・」（津田青楓著『漱石と十弟子』から）

漱石の弟子たち（木曜会）



漱石印譜「漱石」



漱石印譜「夏目金印」



漱石印譜「漱石之印」

漱石の文房具
君が名や硯に書いては洗ひ消す（漱石）
墨の香や奈良の都の古梅園（漱石）
鉄筆や水晶刻む窓の梅（漱石）



漱石印譜「漱石」



漱石愛用の筆、硯など。

漱石と戦争

漱石と子規は親友ではあったが、生き方は対照的であった。子規は社会に参加して活躍することを望んだが、漱石は、厭世的で俗世間から脱出することを願った。戦争に関しては、子規は日本の勝利を喜んだ。漱石は、若いころは国家主義的であったが、次第に、戦争を憎み、個人主義の思想から、戦争に反対するようになっていった。子規は若くして亡くなったので仕方がない面もあるが、明治は司馬遼太郎がえがくような明るい時代ではない。(半沢英一『雲の先の修羅』東信堂2009年11月参照)

「日清戦争愉快に堪えず」と子規は、国民と同じように、開戦に熱狂し、従軍記者に志願した。漱石は北海道に戸籍を移し、兵役を逃れた。日露戦争勃発の頃、ロンドンにいた漱石は神経衰弱と思われていたようで、立花の某が「戦争で日本負けよと夏目云々」と口ばししていたと芳賀某へ伝えている。しかし、開戦直後には「従軍行」という国家主義的な新体詩を発表している。漱石の心は揺れ動いていたようである。

漱石は『吾輩は猫である』や『幻影の盾』(明治38年4月)『趣味の遺伝』(明治39年1月)で反戦の言葉を記した。死の年の大正5年(1916)1月に発表した随筆『点頭録』の「軍国主義」の章で、漱石は、「**此時代錯誤的精神が自由と平和を愛する彼等に斯く多大の影響を与えた事を悲しむ**」と記している。

「夏目漱石は戦争のもたらした悲劇を描き、戦争を愚劣で悲惨なものと考えていた。そして、戦争の原因は権力者たちが利権を拡大するために起こしたものととらえ、日露戦争後の政府の政策に対して批判的な態度を持ち続けていた。その上で、漱石は、個人の自由や権利を尊重する考え方と相容れないものとして、戦争や人権の抑圧に反対する姿勢を持ち続けていた。」(水川隆夫『夏目漱石と戦争』平凡社新書、2010年6月より)



漱石筆「菊自画賛」紙本墨筆
大正5年頃 127×32 cm 「白茶
と黄菊と咲いて日本哉 漱石」

博士号辞退事件 明治44年(1911) 2月～4月

「小生は今日までの夏目なにがしとして世を渡って参りましたし、これから先もやはりただの夏目なにがしで暮らしたい希望を持って居ります。」

したがって私は博士の学位をいただきたくないのであります。」

(2月21日付手紙より、この日を「**漱石の日**」という)

「学位令の解釈上、学位は辞退し得べしとの判断を下す余地あるにも拘らず、毫も小生の意志を眼中に置くことなく、一函に辞退し得ずと定められたる文部大臣に対し、小生は不快の念を抱くものなる事を茲に言明致します。」(4月13日付手紙より)

「余は博士制度を破壊しなければならんとは迄は考へない。」

博士でなければ学者でない様に、世間を思はせる程博士に価値を賦与したならば、学問は少数の博士の専有物となつて、僅かな学者的貴族が、学権を掌握し尽すに至ると共に、選に洩れたる他は全く閑却されるの結果として、厭ふべき弊害の続出せん事を余は切に憂ふるものである。余は此意味に於て仏蘭西にアカデミーのある事すらも快よく思つて居らぬ。従つて余の博士を辞退したのは徹頭徹尾主義の問題である。」

(明治44年4月15日『東京朝日新聞』「博士問題の成行」2、より)



詩を書かん君墨を磨れ今朝の春(漱石)
すみれほど
董程な小さき人に生れたし(漱石)
ゆたかほど
なき母の湯婆やさめて十二年(漱石)

付録

「昔から大きな芸術家は守成者であるよりも創業者である。創業者である以上、その人は黒人ではなくつて、素人でなければならぬ。他人の立てた門を潜るのではなくつて、自分が新しく門を立てる以上、純然たる素人であればならぬのである。」（漱石、評論『素人と黒人』^{しやうととくろん} 1914年1月より）

漱石は東大で英文学を専攻したが「三年勉強して、ついに文学は解らずじまいだったのです」ついで教師になったが「腹の中は空虚」「不愉快」だった。「イギリスで文学がわからず神経衰弱になったが、その結果、文学とはどんなものであるか、その概念を根本的に自力で作りあげるより外に、私を救う途はないのだと悟ったのです。まねごとではなく、「自己本位」で自己本位の『文学論』を著述するのを私の生涯の事業として考えたのです。」

『私の個人主義』大正3年11月公演より）

イギリスから帰国して、40歳頃、『文学論』は失敗だと認め、大学を辞め、作家となった。

「死ぬか生きるか、命のやりとりをするような維新の志士の
ごとき烈しい精神で文学をやってみたい。」

「死んだら皆に柩の前で万歳を唱へてもらひたいとほんとうに思つてゐる。私は意識が生るすべてであると考えが同じ意識が私の全部とは思はない死んでも自分はある、しかも本来の自分には死んで始めて還れるのだと考えてゐる。・・・死を人間の帰着する最も幸福な状態だと・・・」（大正3年11月14日付、岡田耕三宛手紙より）

「死んで此太平を得る」（修善寺の大患後に）「死は生よりも尊とい」（『硝子戸の中』八、大正4年1月より）

漱石は漢詩を200余首ほど作つたらしいが、『明暗』執筆時の、最晩年の漢詩75首について、松岡譲は「私はこれらの数詩を漱石の全文芸作品中の最高位にあるものと考へてゐる。」と述べている。吉川幸次郎著『漱石詩注』の第三、岩波新書に詳しい解説がある。

津田青楓の影響

「津田君の画には技巧がないと共に、人の意を迎へたり、世に媚びたりする態度がどこにも見えません。一直線に自分の芸術的良心に命令された通り動いて行く丈です。・・・彼の偽はらざる天真の発現が伴つてゐるのです。」

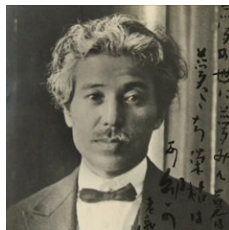
（漱石『美術新報』大正4年10月）

青楓は貧困を恐れず、画の道をひたすら進んだ。その純粋な姿勢に漱石は感銘した。

「私は出来栄えの如何より画いた事が愉快です。」（漱石の青楓宛手紙より）

漱石は画をかくことによって忘我の心境に到達した。

彼は、小説よりも画の中に自己を表現したいと願つていたようである。



津田青楓（1880～1978）

青楓の漱石筆「柳蔭人馬図」の評、「色彩は濁つてはゐるが何だか神韻縹渺^{しんいんかうひやう}たるニュアンスがある。画かきには出来ないし、ただの素人にも出来ない。偉人漱石の画といふより他ない」（青楓『春秋九十五年』より）

「先生は才気の横溢した小器用な字は嫌いのようだった」

「先生はいつか妙なことを言ったことがあった。俺は不愉快だから画を描いて楽しむんだと。・・・先生の画をかけることは窓を開けて、いい空気を入れたいと言ふことなんだ。」「先生は現実よりも空想の方が好きでないんですか。小説では現実を取扱はなければならないんで、午後からは人里はなれた別荘にでも行くつもりで、あんな山の画が出るんじゃないでせうか」（津田青楓『漱石と十弟子』世界文庫、昭和23年より）

漱石のモチベーション 創作の動機は、現実への不満（内発的）。暗い内部世界の表現。大きな五つの戦争。

漱石は「不倫な恋」（新しい愛の可能性）と「殺戮^{さうく}」（戦争・暴力）という「人間の二つの宿命的な罪業」を作品のテーマとした。『明暗』を「愛の戦争」と呼び、利己主義や戦争を乗りこえた、新しい人間のあり方を探求した。

夏目漱石の造語

「則天去私」「高等遊民」「新陳代謝」「反射」「無意識」「価値」「電力」「肩が凝る」「電光石火」「ひどい」「浪漫」「沢山」「兎に角」等。



グレン・グールド

彼は、1982年10月50歳で亡くなった。死の床に『聖書』と漱石の『草枕』があった。彼は漱石に取りつかれていたという。漱石の本はすべて所蔵していたらしい。

家族たち

「私が相応に物心がついてからの父については、不幸にして、ただ恐ろしかったという記憶のみ鮮明である。私ばかりでなく他の兄弟達も、

当時の思い出はいずれ私と大差ないと思う。」（漱石の二男 夏目伸六）

祖母も母も叔父伸六も皆一緒に、

四女の愛子が漱石の一番のお気に入りだったと言っている。

愛子という叔母は小さい頃ぎつくばらんに何でも言える子で、父のこともあまり怖がらず、平気で何でも言ったそうである。母を「筆」と呼び捨てにするのに、

この叔母のことは「愛子さん」と「さん」までつけて

優しい声を出して呼んだと母から聞かされた。

私は当時まだ健在だった叔母榮子と叔母愛子を訪ねた。

漱石のことが話題に上った時、

「叔母様たちは、ことに愛子叔母様は

お祖父様にとても可愛がられたそうだから、

ちつとも怖くなかったのでしょうか？」と聞いた。

驚いたことに、二人の叔母が同時に

「怖かったわよ。だっていつ突然怒られるかわからなかったんですもの」と反射的に言い返してきた。二人の叔母からこの答えを聞いた時、

漱石はなんと孤独な人だったのだろうとつくづく気の毒に思った。

家族の誰一人として、彼を恐れなかった人がいなかったのだから。

（漱石の長女筆子の娘 松岡陽子マックレイン）

母は少しずつボケてきて、昔よく知っていた人々のこともほとんど

忘れてしまっていた。四六時中献身的に世話をしていた私の妹のこと

さえもう見分けがつかないほどだった。

それにもかかわらずただ一つ母が忘れなかったことは、

自分の父親がいかに怖かったかということであった。

漱石の肖像のついた千円札を母に見せて「これ誰かわかる？」と聞くと、

「お父様でしょう。とても怖かったわ」と、

まるで昨日のことに言うので私も驚いてしまった。（松岡陽子マックレイン）

- 長女 筆子 作家、松岡譲夫人 筆子の二女、松岡陽子マックレイン 文学者・オレゴン大学名誉教授
- 二女 恒子 江副養蔵と結婚離婚 筆子の四女、半藤末利子（松岡陽子の妹）随筆家
- 三女 栄子 生涯独身で母鏡子の世話をした
- 四女 愛子 仲地夫人
- 長男 純一 バイオリニスト→子は夏目房之介（漫画家）
- 二男 伸六 文芸春秋社を経て随筆家
- 五女 雛子 早逝



はんどうまり こ
半藤末利子（松岡陽子の妹）



松岡陽子マックレイン



74 歳頃の鏡子夫人と孫の松岡陽子



筆子（1949 年）



完成した漱石の墓の前で（大正 6 年頃？）



猫塚の前の夏目伸六